



愛隣幼稚園..... 園だより 13. 4月号

ずっと繋がる仲間になる

今年は春が一気にやってきました。三月の初め頃までは、まだ水仙も沈丁花も咲かない遅い春だなあと感じていました。ところが夏を思わせる陽気に背中を押され、春を告げる花々が一気に満開となりました。でも、そんな春は一気にお腹がいっぱいになってしまったような感じで、私は少し残念でした。園庭の桜も入園式を待たず、ピンクから緑へと色を変えました。幼稚園にも新しい仲間が加わり、今年色の愛隣幼稚園がスタートしました。

春は出会いの時です。当たり前すぎてわざわざ文字にするほどの事でもないように思います。でも、愛隣でのこの春の出会いがひょっとすると一生続く仲間との出会いかもしれません。年度末の園だよりも仲間になることについて書きましたが、年度の始め、改めてこのことに触れたいと思います。

春休み、小学校を卒業した「そら組」の人たちが幼稚園で同窓会を開きました。女の子たちが自主的に企画をかって出て、担任だった真希子先生(今年ほうみ組担任)と相談しながら準備を進めてくれました。この日の桜はほぼ満開で、まるでこの日のためにあったかのようでした。たくさんの卒業生たちとお母さんたちが「ひさしぶり〜!」と、満面の笑みで門をはいってきます。6年生にはしばらく会っていなかったことが、若干のハードルではありますが、それでも次第に打ち解けて、あの頃のようなおしゃべりが始まっていました。驚いたことにこの日、九州から2組、大阪から1組の仲間も来ていました。子どもだけではなく、大人も仲間だったからこそです。そして今年二十歳になったほし組も、担任交えての同窓会を開き、この他のクラスも公園に集まりミニ同窓会をしていたようです。私は保育所育ちですが、同窓会をしたのは卒園してすぐのたった1回です。幼稚園の仲間がこんなふうに集まるのはやはり少し珍しいかもしれません。何が違うのでしょうか?比べてみると、大きく違うことの中に、「仲間を感じて、仲間と創る生活」があると思います。<幼児期に仲間を感じ、仲間と創る生活がある。そしてそれが心の中にいいものとして記憶される。その場が幼稚園である。> 私の幼児期にはこの記憶があまりないような気がします。

親元で1日の大部分を過ごしてきた子どもたちが、今日から子どもたちの集団の中に入っていきます。「泣かないで離れられますように」「なんでも自分でできますように」というのが最初の願いでしょうか。この次くらいからは願う中身はそれぞれにやや方向が異なってくるかもしれません。様々な願いがありますが、私たちはその中で「仲間を感じて、仲間と創る生活」を大切にしたいと考えます。子どもも大人も一緒にこの生活をしていきたいと願っています。《人は一人では生きてゆくことができない。自分が仲間の中で受け入れられ、自分もまた仲間を受け入れることを迫られる。自分が皆と違うように、皆も自分と違うことを認め、更にそれをよいことと思う。その仲間が知恵を出し合い、力を合わせた時に皆の想像を超えた出来事が起こる。するとそれまで感じたことのない情動が湧きあがり、しだいに心の中が暖かい充足感に満たされる。仲間がいること、仲間といることはかけがえのないものと思う。》こんなことを幼児期の子どもたちも経験することができるのです。彼らは無意識ですが、そうやって仲間になり二十歳になってもまだ繋がっているのです。

春は出会いの時です。当分の間は『仲間』にはなれません。泣いたり怒ったり、笑ったり喜んだり、うまくはいかないやりとりを日々重ねながらやがて『仲間』になり、『仲間はいい』と思うひとり一人になっていきます。子どもが出会いました。大人も出会いました。私たちも子どもたちに負けない『仲間』になりたいと思います。